

中世曹洞宗切紙の分類試論（十六）

― 参話（宗旨・公案・口訣）關係を中心として（上） ―

石 川 力 山

一はじめに

すでにしばしば述べてきたように、切紙資料の性格として、同一事項を内容とするものについても、切紙の本文と、この本文の内容理解を助けるためにこれを象徴的な図や円相等を組み合わせてその趣旨を示そうとする「大事」、さらにこの趣旨を問答体で師と弟子の会話の形式で内容を敷衍しようとする「参」の、三種の切紙が多く、事項に付随している。そして、これも切紙の資料的性格の重要な点であるが、切紙によって伝えられるべき個々の事項は、それ自体が宗旨を示すものとは異なり、それが極めて具体的な儀礼を指南するようなものであったとしても、また差別切紙と判断される荒唐無稽な説話を内容とする「河原根本之切紙」や「罰書龜鑑」のようなものでも、すべて曹洞の宗旨を内容とするものとして信じられ、それ故にまた師から弟子へ親しく秘密相承

されてきた。末尾に「可秘々々」あるいは「不可許他見」の文言がしばしば見られるのも、この立場を反映したものである。さらに、殆んど切紙に「参」が付随していることから察せられるように、師資の間で親しく参究されなければならない事項であった。こうした意味からは、本稿より紹介する「参話」は、これまでも折に触れて切紙の本文や大事とともに紹介してきたものと重複するもので、ここに改めて項目を別に立てて紹介するまでもないと考えられるが、特に口訣の内容は多岐に亘り、はじめに立てた十一項目に収録不可能な内容もあり、さらにその中心となる公案・禅關係の参とともにここにまとめて宗旨・公案・口訣に関する参話關係の切紙として、一括して紹介しておくことにしたい。

さて、この参話關係の切紙のどの部分より紹介して行くかということであるが、その文章形態が禅問答という師資の問答形式から当然推測されるのは、発生的には宋代中国禅以来

の伝統を有する公案看話の禪が前提となっているであろうということである。日本中世の禪界は周知のように、臨済宗も曹洞宗も公案話頭を工夫する看話の禪に席巻された観があり、そのための手引書、手控え書として、門参・本参・秘参・参禅等と呼ばれる一群の文献資料が出現した。臨済宗では密参録・密参覚帳、時代が下ると行巻等という。門参とは各門派（たとえば太源派・通幻派・石屋派）毎の独自の問答商量の仕方という意味で、他の派の著語・下語の下し方や入室独参の仕方がしきりと意識され、独自の参であることが誇りとされた。ここでいう参禅とは、入室・独参における師資の商量の仕方を意味する。

このように、公宗禅関係の文献も門派毎に多数出現し、曹洞宗では夜参と呼ばれる公案禅参究の形式や、扱う公案話頭の構成についても、一夏安居中にどのような順序でこれを取り上げるかという公式のカリキュラムも整備された。したがって、このような話頭参究の修行方法を、改めて切紙という形式で別に伝えるということは一見 unnecessary にも思われるが、切紙の伝授は、師資の嗣法相承を前提とするものでもあり、門参における公的性格の強い看話修行とは当然異なる緻密な参究、親切極まりない参の数々が残されることになった。本稿ではこうした公案禅の性格の強い参話関係の切紙を紹介するわけであるが、その資料的性格を考慮して、まず宗門におけ

る夜参の問題を考え、次いで伝統的な公案話頭に関する切紙資料の紹介に移りたい。

二 宗門における夜参の伝統

岐阜県関市竜泰寺所蔵の華叟派⁽³⁾の門参『宗門之一大事因縁』には、曹洞宗における朝参・夜参の行法に関する興味ある記載が見られる。すなわち、

夜参ト者、日本ニ云処ノ語、陞堂、上堂ノアル則ンハ小参アリ、晩参アリ、日本ニモ此旨ハアリトイヘドモ、靈（寂靈）和尚老後迄此旨ヲ不^レ許給^ニ、御遷化ノ砌、於^ニ青原山永沢寺^ニ行初玉エリ、然^レ陞堂、上堂無^レ之間、一拶ト号シ、朝参ト名、晩参ヲ号^ニ夜参^ニト云、此大法ハ嗣法伝底之法師、第一人ニ可付者也、然間、自余此旨ヲ不^レ許玉^ニ、最乗開山了庵和尚一人付シ玉ヘリ、其ノ余ノ九派ハ傍出也、

とあり、『上州大泉山補陀寺続伝記』『無極慧撤伝』の評にも、

中古盛行称^ニ夜参^ニ者、徵言始^ニ于通幻^ニ、而其規則円備者、無極・月江両師所^ニ定制^ニ乎、又代語者、了庵・無極・月江時世、宗説共明、而快庵以後一変、成^ニ饒露迂回^ニ也、

（『曹全』史伝上、六三二頁）

とあるように、通幻寂靈（一二三二～一三九一）の晩年に始められ、無極慧徹や月江正文の頃に軌範が整ったとされる。こ

の叢林行事としての夜参の伝統に関する切紙についてはすでにふれているので、ここでは再説しないが、一例だけ紹介すると、三重県広泰寺所蔵、寛永十七年（一六四〇）英刹所伝の「夜参大夏之切紙」には、

（端裏）夜参大夏之切紙

夫夜参者、宗門一大夏因縁也、叶_レ句不_レ叶_レ意則_レ、見_レ形如_レ不_レ見_レ真、叶_レ意不_レ叶_レ句則_レ、不_レ円_レ正宗、意句合好相応、句々血脈連属、如_レ鈎如_レ鎖者、是我宗正的也、隱密肝要句義等、法師一人外不_レ可_レ許_レ之、若又属_レ流布、我宗的要擲_レ泥中_レ者乎、吾今授_レ你、々能護持_レ即荷_レ扶宗乘_レ、莫_レ令_レ斷絶、々々々、

寂靈在判

此外、拳唱不_レ可_レ有_レ之

○尽——自己——○尽——偏
○不尽——目前——○不尽——正——一致——○尽——始
○不尽——本——不二
此外、拳唱不_レ可_レ有_レ之

寂灵授惠明
惠明授無極
無極授月江
月江授密山
密山授陳叟
陳叟代々
流伝頼閑

とあり、通幻にはじまる伝承という点では軌を一にする。この夜参において取りあげられる古則を目錄の形で示したものが「夜参之目錄で」、小田原市香林寺所蔵、十三世大休義所伝の「大樹派夜参之目錄」を次に紹介しておく。

大樹派夜参之目錄

- 案山点頭、白雲功尽、青山秀、透_レ過_レ那邊_レ看_レ、方有_レ出身路、
- 万機休罷、千聖不携、寒炉無_レ火、独臥_レ虚堂、宝殿無_レ人不侍立、不_レ種、梧桐免_レ鳳来、
- 江国、春風——花裡_レ、当処便是風風城、天然貴胤本非_レ功、
- 坐底坐受用、立底立承当、
- 樓閣千家、月江——秋、德合_レ乾坤_レ洞勢隆、
- 百性日用不_レ知、月不_レ知_レ明月秋、王不存_レ王位、
- 湘之南潭之北、月松不_レ犯東西岸、空王殿上絶_レ知音、
- 五台拍_レ手峨嵋笑、黑狗爛銀蹄白象崑崙騎、
- 三世諸仏不_レ知_レ有、狸奴白牯却知_レ有、
- 従保善開山嫡々相承来到_レ吾、々今附_レ囑林渚、此外於_レ伝法_レ不_レ遺_レ一切_レ授畢、

住海眼伝法沙門方祝樵子

于時寛永十七_{庚辰}年二月吉_印

「融山授英刹

伝附英刹畢

南谷山香林寺

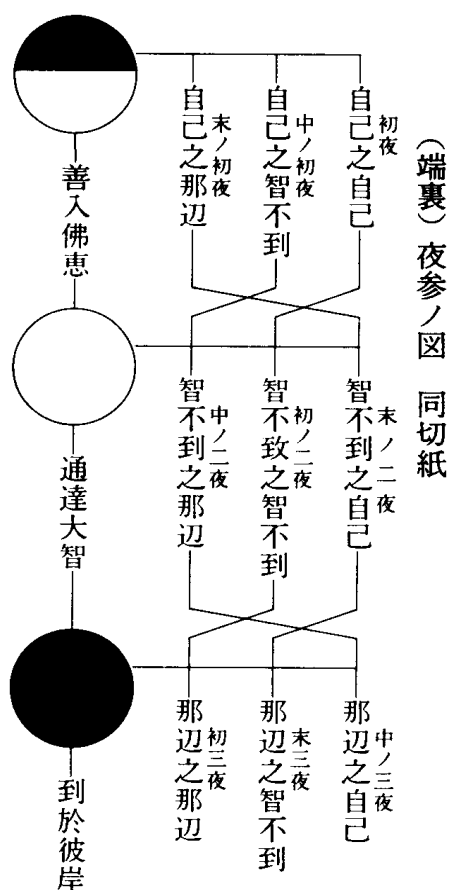
高林十三代大休義叟

大樹派
夜參
本參
目録
(印)

林法樺

ここでは下語の方法まで簡単に記されるが、さらに同じ大樹派のもので、三段階の公案參得を前提にその進み方を示したものとして、同寺所藏、寛永十五年（一六三六）所伝のものに次に掲げる。

ここでは下語の方法まで簡単に記されるが、さらに同じ大



最乗開山了庵和尚代々流伝切紙也

△私云、入初トハ、最初デワ案山點頭也、徹処トハ、自己デハ法眼宗也、転処トハ、自己デハ実家ト見也、自己ノ句面也、

中世曹洞宗切紙の分類試論（十六）（石川）

初入処ト云ワ、智不到デハ入派ナリ、徹処トハ智不到デハ独在也、転処トハ、智不到デハ功ノ点処ナリ、入処トハ、那時デハ入派也、徹処トワ、那邊デ主中主也、双対也、点処トハ那邊デハ這李行履也、転側不到、到側不点トワ句面也、転側トワ世尊ノ色色ニ五十二位ヲ経卷シテ到ルニ依テ転側不到デ、本覚ニハ難^レ到ゾ、到側不点ト云ワ、迦^ニ薩^ヲ不^レ尽、其ノ俗ノ位イニ伍^ノ呈^ニ、三世之諸佛不^レ知^レ有、狸奴白虎還知^レ有ト云ワ双対也、

△奉請 龍天護法善神
白山妙理大権現

于時寬永十五戊寅年雪月吉辰

最乘現住之時

從大樹和尚（花押）

直伝者也

自己・智不到・那邊という曹洞宗における公案参得の階梯は「三位」と呼ばれ、これについてもすでにふれたが、次に示す同じく香林寺所藏、同年所伝の「大樹派本参之次第」は、三位を参得した後の「伝授後之参」までを含むもので、次のようなものである。

大樹派本參之次第

点之分ハ參禪不_レ見、不審ナリ、
死活当頭 大死底

万機休罷 竹篋背觸

香巖樹上 何レモ入派也

爰デ仏界魔界之誦訛在之

活句下承当、 自己転処

自己不点 自己目前一致

自己淵源為ニ瀉山水牯牛ヲ引也

○智不到之分

智不到之所 智不到到底

道吾智不到爰エ引ヘシ

異句之弁 智不到点処

智不到不転 没蹤跡

○那边之分

臨濟家ニハ在リ

那边承当 那边透過

阿誰勘弁 位裡点側

退得那边——行履

那時之三人 了庵大綱無極之拳派ハ別々也

位裡双対

○伝授之参

快庵派ノ参ニ在之、

唯以一大夏因縁故出現於世、

切紙在之、亦快庵派 快庵派

印形未分図

忠国師一円相

黄龍拳頭

俱低一指

同世尊拈花

同雪峰火焰裡

南院古殿重興

同血脈之参

○伝授了後之参ハ

看経

殊^{ニハ}龍天之真像可肝要、以^{スルヲ}秘^{スルヲ}為相

続也

此外教授戒文之参在之、

于時寛永^丙年

初春五日

附与林渚耆衲畢

高林九世長林(花押)

これらの参得が終つて授与されるのが、「了畢之判」で、一種の印可証明書であるが、次に紹介する、香林寺所藏、寛永十三年(一六三六)同寺十一世蘭舟臨渚よりは村首座に授与された「門戸参禅切紙等了畢之判」によれば、

(端裏) 門戸参禅切紙等了畢之判

天室派、大樹一参禅、本参、夜参、到独則迄悉参徹了、

此外伝授後之参并六十通之切紙、

不残一物

附与是村新首座畢、

皆寛永十三^丙子極月十八日

香林寺十一世蘭舟臨渚^(印)叟^(印)(花押)

というもので、天室派・大樹派の室内参禅を了畢した是村には、「伝授後之参」および六十通の切紙も同時に授与されたことが知られ、切紙の伝授が単なる儀礼の指南書等の伝授ではなく、宗旨の参得にもなつてなされる嗣法にも擬えらるる相承物の伝授であつたことが知られる。また「伝授後之参」の例として、やはり香林寺所蔵「安叟派伝授后之参禅」を紹介しておく。

(端裏) 安叟派伝授後参也

安叟派伝授后之参禅也、

△唯以一大事因縁故出現於世、代云、仏々祖々ヨリ紹キ来タガ、皆虚伝デ走、師云、著語、代云、元一法無レ可レ与レ人、

△師云、俱低一指、代云、其レデモ無イゾ、是レデモ無イゾ、師云、其レハ何ントテ、代云、ソウジテ其レデモ走ヌ、師云、何ニ落居シテ、ソウジテ其レデモ無イゾ、代云、元一法無レ可レ与レ人、

△三世諸佛向ニ火焰裡ニ用、代云、二頭——ニ心法、底ニ鳥火燭点テ走、師云、大法輪ヲ点ジ用ヲ、代云、嗣書ヲ取テ懷中ニ収メテ走、

△世尊拈華ヲ、代云、一指急度立テ、法本法本無法、無法法亦如是、師云、迦葉微笑、代云、三拝ノ皈ル、師云、着語、代云、毘婆尸佛早留心、直至今不レ得妙、師云、血脈一点ヲ、代云、師前入指以一円相作、師云、着語、代云、諸佛大円鑑、内外無ニ瑕翳、血脈二字ヲ、代云、陰ト陽トデ走、師云、恁麼時如何、代云、静陰以躰トシ、

動陽以為足、師云、過去七佛ヨリ的々相承シテ、古今連綿契証シ用ヲ、代云、於レ中血脈貫通處、一種葛藤々々纏、師云、伝授道場、代云、無上大涅槃、円明静寂照、師云、寂照ヲ、代云、勃陀勃地デ走、人トハテト云句面也、師云、血脈収用ヲ、代云、善同問訊デ走、心ワ、師ノ前ニ合掌ノ合掌ヲアギトノ下ニアテ、鉢内アル時モ用ヲスルナリ、爰ガ血脈ノ根本ダゾ、師云、畢竟ヲ、代云、内心契證、外伝ニ袈裟、

畢竟也

長享(三)年中三月吉日

天室正運(花押)

附法

大樹乘慶

切紙伝授の歴史がどこまで遡れるのか不明であるが、この長享三年(一四三八九)という書写年は極めて古いもので、切紙の発生があるいは参話のメモの形式から発展したものであるかということをおしめる。

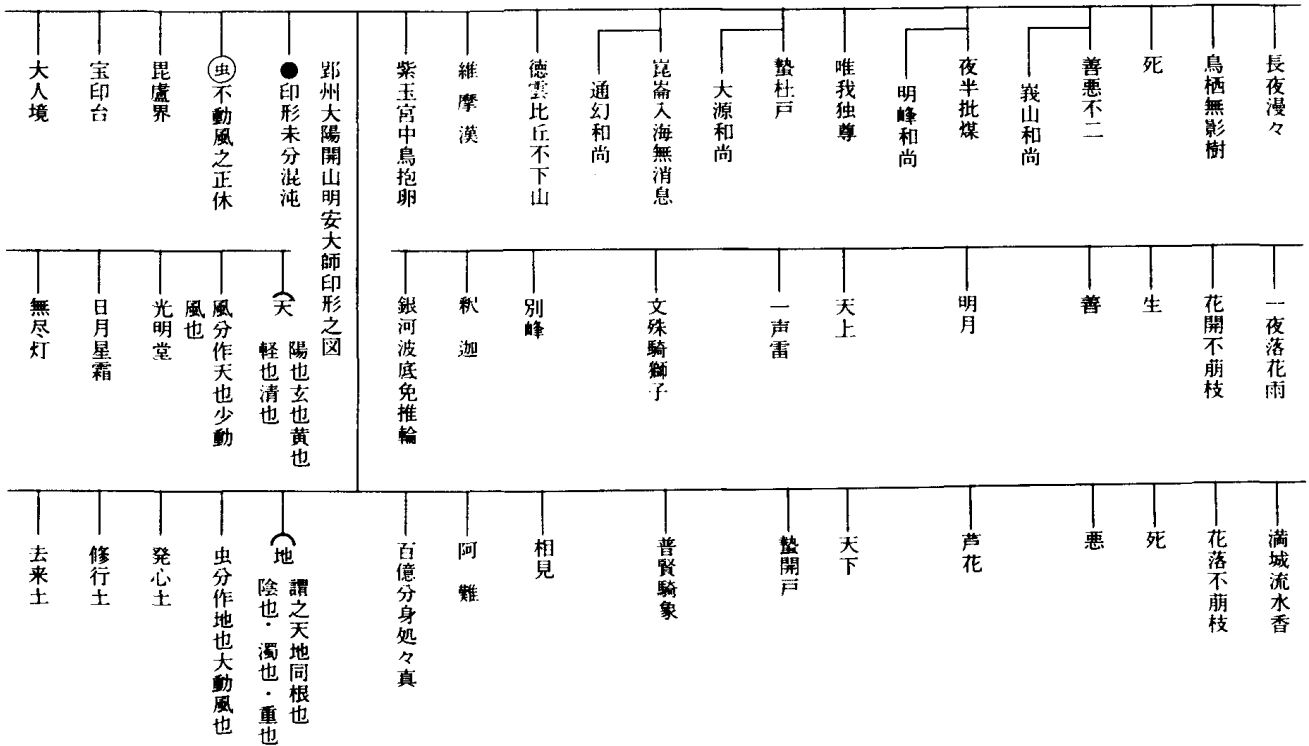
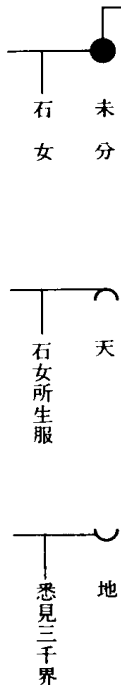
また次に紹介する、大陽・投子の代付問題を前提に、これに関わる浮山の語の記録とされる「夜参之切紙」は、混沌未分の状態から天地が生成する次第になぞらえて、ここでもやはり三段階の下語の仕方を示すもので、天正元年(一五七三)香林寺乗方に伝えられたものである。

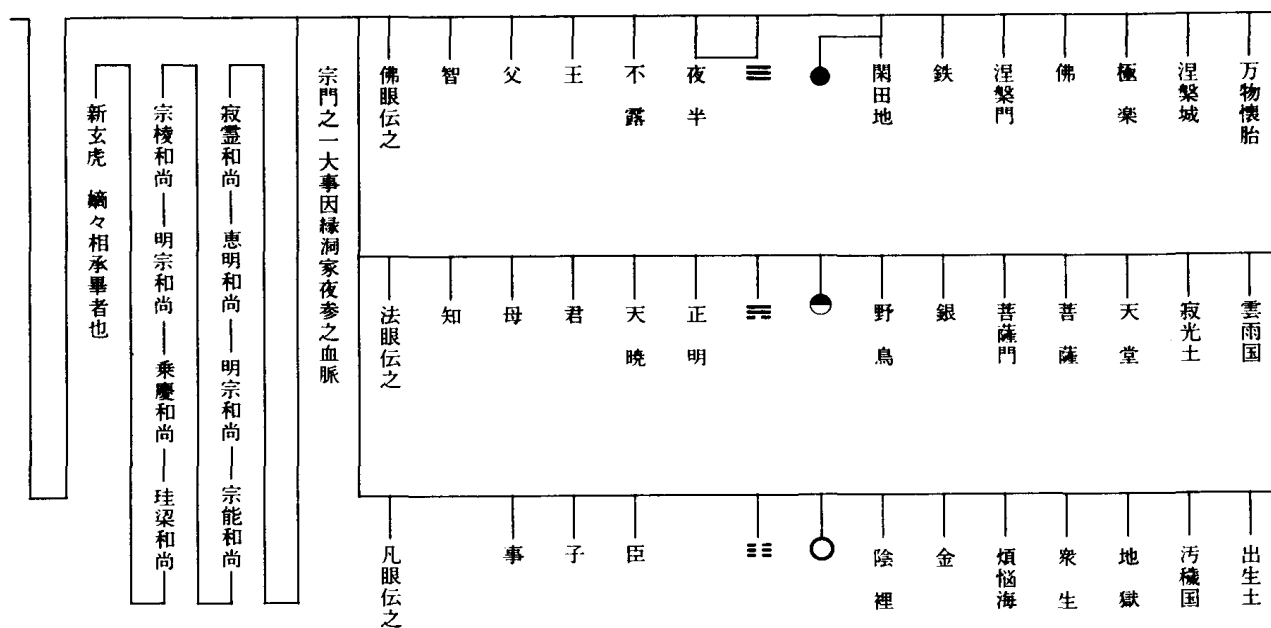
（端裏）夜參之切紙

附与玄虎

大師告遠和尚云、知印形未分時無遠則、云、如何是印形未分時、師以手●此形示、問、印形分破作天時如何、師以手作（此形示、問、印形分破作地時如何、師以手作）此形示、問、如何是印形未分性、師時默、示、問、如何是天形性、師則出陽息示、問、如何是地形性、師則出陰息示、遠忽然大悟、礼謝去、後某甲遠書印形圖并圈續以作宗門一大夏因緣也、謂之三固劔、又謂之三談訣、又謂之三世血脈、又謂之三寶論、又謂之三生眼也、夫印形之葛藤者天之陽氣下地之陰氣合而自生動搖之氣、自生万物之体、殊有卵生胎生濕生化生之四生、各自具五蘊、生六根矣、愚而迷故皮毛戴角而隨起滅之深坑、輪迴三界、智而怪故、教外別伝而出生死窠臼、遊履十方、皆是天風地虫之所作也、何故、威音如來昔坐斷印形中而未曾出地生、此時諸佛不知諸佛、菩薩不見菩薩、謂之不見不知之時、如來出世時、廻光遍照而深省本身之相、得為三界導師、曾靈山会上拈一枝之芳而引得頭陀之微笑、後正法流布天下、皆是印形分破以來之妙道也、若問印形未分時、無一法、吾師明安大師、深省本身之相、權立此三種圈統、以附某甲遠、遠信受奉行畢、諸方禪流莫疑、此一大夏因緣、可秘々々、某甲遠書写、

△古語下語

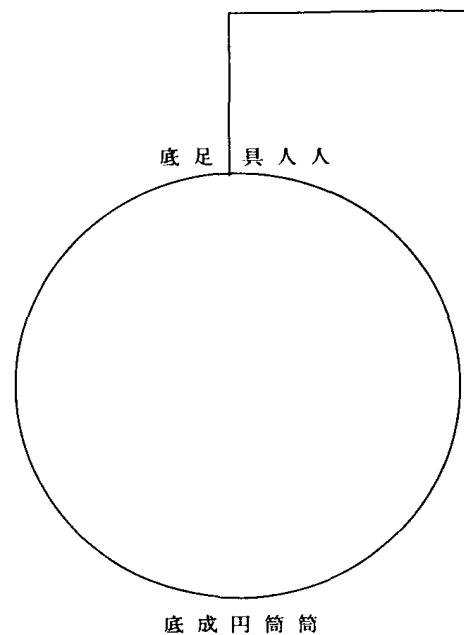




切紙資料で扱われる公案参得の場は、「夜参（晩参）」とする例が圧倒的に多いが、「本参（朝参）」の名でも多少扱われている。先に見た「大樹寺本参之次第」は、内容から見て明らかに「夜参」であるが、次に見るやはり香林寺所蔵の天正十年（一五八二）文察所伝の古則目録は、切紙資料では殆んど扱われない古則であり、授者韓山の識語によれば、自ら随

安叟派本源嫡子伝者也
他見 佛罰法罰忽相当者也、
香林中興乗方野衲

此円相者以應量器可輪之、故者、応量無窮佛心無始無終、
本師釈迦牟尼佛陀附屬迦葉、自第一坐迦葉嫡々相承而到吾、
如今宗本伝附既畢也、
日本永禄二己未年二月晦日
前永平津英 珪梁 玄虎代々伝附了
于時天正元年 前永平



身し参徹した体験を通して、門下の志気を鼓舞しようとしたもので、相伝資料の伝授ではなく、明らかに新しい切紙の出現の契機を示唆しており、切紙成立史の上からでも重要なものと考えられる。

（本参目録）

外道問仏話 南泉斬猫
趙州石橋話 雲門話墮話
黄檗檀酒糟 雲門餠餅
南泉平常心是道 俱胝一指
応喏下主人公 夾山見船子話
万法不侶話 雲門転句
馬祖不昧本来人

這ヶ公案、予隨身志氣甚々故、参徹了、野衲顧見此旨如是書了也

大中、興派下

前惣持韓山□野衲

天正十刁梅雨廿日

文察首座（花押）

公案参得を期す看話の禅は、最終的には参徹・了畢ということとで師の允許を受けることになるが、しかし「十成を忌む」曹洞の家風からは、参禅了畢後は悟跡を払拭して没縦跡

をめざすことが求められ、これを記す切紙が「参禅掃除」の切紙である。少し時代は下るが、円山派下に伝承された例を西明寺所蔵切紙の中から紹介しておく。

（端裏）○参禅掃除

門参等了畢ノ後、最初ヨリ向_レ到_ル迄、一々目録_シ記、師資慇懃ニ焼香礼拝シテ、師資拂子拈_テ一々参話挙着等見テ、一々示曰、サテモ無_ソ、別云ヘ云ヘ、師、不用言句、等閑作礼而去也、

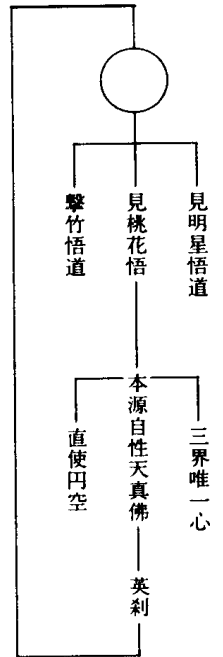
十分ノ処ヲモサテモナイト云、別ニ云ヘト示カ、機存回互語忌_ニ十成_ノ格式也、纔モ是処見十成ニ滞ル則、早ク淨潔ノ塵埃ト云ヲ生ル也、掃除機_ヲ用テ悟跡ヲ忘ル_レ也、

十成を忌む家風とはいっても、看話公案の禅に悟道の消息が期待されていることはまぎれもなく、その意味でも釈尊の見明星悟道、靈雲の見桃花悟道、香巖の撃竹悟道の因係は周知のこととて、これを内容とする切紙もある。広泰寺所蔵、寛永十七年（一六四〇）英刹所伝の「三悟道切紙」がそれで、内容は極めて簡略な記述にとどまるものである。

（端裏）三悟道切紙

○干時延文三年_{丙申}八月念日

○永年開山大佛道元禅师



○于時寛永十七年三月吉日

○金龍山海眼院代々相承而今伝附英刹畢

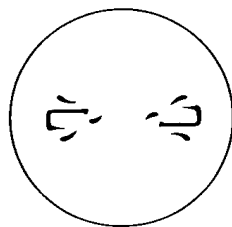
ここに併せ記される延文三年（一三五八）八月十日と道元との必然的な関係については不明であるが、三種の悟道がいずれも自己の本心に契当したことであるとする趣旨を示そうとしたものである。

三参話関係切紙

切紙の伝授がそのまま嗣法相統を意味するものでないことはすでに見た通りであるが、⁽⁵⁾嗣法相統の前提になることは明らかで、その意味から重要視される古則は、『大梵天王問佛決疑經』という偽經を出典とする、摩訶迦葉への以心伝心・教外別伝の根拠となった靈山会上の「拈花微笑」の因縁である。特に釈尊の付法の語である「正法眼蔵涅槃妙心、実相無相微妙法門」には象徴的意味がこめられ、多くの種類の切紙が作られた。「拈華之切紙」「正法内意」等と呼ばれる切紙がそれで、正法・眼蔵・涅槃・妙心・実相・無相・微妙・法

門・教外・別伝の十語に下語する「添物十則」や、拈華瞬月・破顔微笑・吾有・正・法眼・蔵・涅槃・妙心・実相・無相・微妙・附属の十三種の各語に下語する「拈花之十三種」と呼ばれる切紙もこれに類する。以下、多少重複する部分もあるが、室内関係の切紙の補足をする意味で、いくつかの例を紹介してみる。

まず、「拈花微笑」の本則全体を示す切紙として、永光寺所蔵のものから、寛永八年（一六三一）久外婁良所伝の「拈華之参」、同じく寛永元年（一六二四）婁良所伝の「拈華附属切紙」の二種を掲げる。



（端裏）拈華之切紙

拈華之参

○世尊云、在吾——吾不見時何不^ミ見^レ吾^レ

正法眼蔵——看度不^ミ看^レ暗昏々^ク

涅槃妙心——心華發明照^ミ十方刹^ニ

実相無相——靈々寂々^ニ無^ニ色空^ニ

微妙法門——葉落^サ歸^キ根来時無^レ口^ク

摩訶大迦葉——心境空寂体如々^ク

附属畢——以心伝心法、止止不須説我法妙難^シ思^フ

先世尊トハ、人々具足底、妙主也、吾トハ世間二伴、吾也、下
句吾ハ本分ノ吾也、毘盧師報応、主也、三世諸佛モ護持スル
処、一大事也、此吾ハ始終不見主也、不見妙主、明ルガ吾相見
也、急度拈玉シモ此吾也、不見此吾ヲ能心得微笑、玉也、正
法、空不空世間出世間、善惡邪正、緑紅、共夫々伴テ充滿
底一法也、虚空充塞無透故、一片一等シテ看不見、眼蔵
十分露テモ根本無形妙法ナレバ、暗昧シテ無明也、昏也、
涅槃別テ不レ生不レ滅心也、心華無開落、迷悟依開落アリ、
悟ガ心華發明也、妙心十方、刹土充滿也、照トハ悟也、明也、
眞実相靈々也、不隠也、無相、バ寂々也、色有爲、空、無爲
也、無相、バ色空ナシ、微妙一片万法生テ、極ミレバ妙シ
テ幽微也、悟広大無辺也、葉落根歸トハ、法界上而万幽
遠幽微妙位、歸也、門、面也、法門トハ法界、顯露法也、来
テ不見也、故無レ口ト也、大迦葉トハ世尊同心也、具足妙主
也、心同也、境界也、心虚空如也、境界、根本無形、バ寂
也、本体如然也、世尊迦葉共如々也、附屬以レ、心伝心也、即
今止止、不レ須レ説、我法、妙、難レ思ト也、師資一般
処、到、止々―思也、

于時寛永辛未歲六月廿八日

於洞谷山重書之旨也 久外嫺良（花押）

（端裏）拈華附屬切紙

拈華付屬之話

伝法偈云、法本法無法、無法法亦法、今付ニ無法ニ時、

法々何曾法、

師示云、大覺世尊拈華話、何トテ拈華付屬話トハ云タゾ、
甚云モ俛テ走、●俛云心ヲ、●師推除其跡坐、●其
心、●過々遠々ヨリノ堅約テ走、●其堅約ヲ、●心
通レ心、●心通処ヲ、●拈バ微笑、●到レ于今莫ニ断絶
心、●拳、●心法、●心伝ニ断絶走、●証拠ヲ、●拳、●冬来毎ニ
寒、●夏毎来何、●燠テ走、●教外別伝、●不立文字法見ヨ、
寒燠ノ外テ走、●拳、●元来無法ナル故、●本法ハ何トモ成走、
●伝法偈本法、●拳、●默坐、●何トテ、●拳、●何モ云バ万法成
申、●証拠ヲ、●拳、●始終不尽妙ガ無法本法テ走、●畢竟、
速礼三拜、

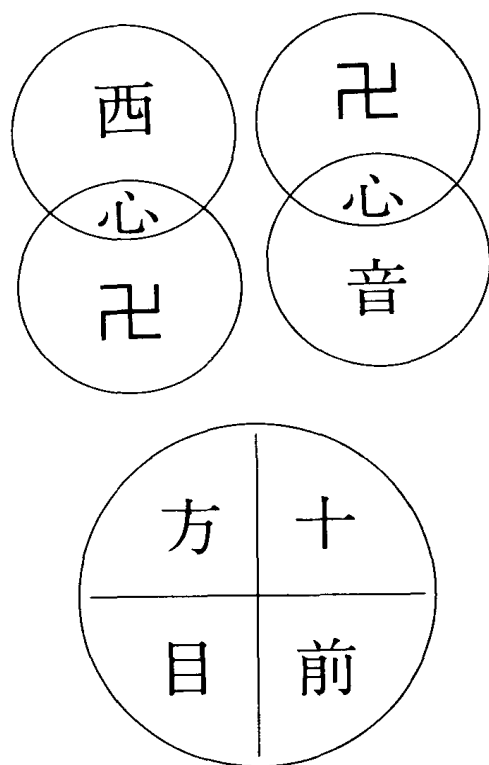
於洞谷山重書之畢 嫺良（花押）

寛永元年甲子夏六月伝授之者也、

前者は「正法眼蔵」以下の六語を基礎に据え、その意味を
注釈したものであり、後者は伝法偈も添えて、簡潔な参にま
とめたものである。また、禅家が標榜する「以心伝心」の口
訣に関する切紙として、やはり永光寺所蔵で、筆跡や印から
みて明庵東察より久外嫺良に伝えられた「以心伝心之書秘
訣」、同寺所蔵、明暦四年（一六五八）慈徳寺独応より広沢に
授与された仮題「拈華微笑参」の二種を掲げる。

以心伝心之書秘訣

釈尊、一手指^シ天^ヲ、一手指^ハ地^ヲ云、天上天下唯我独尊、云



師云、唯我^{コト}、資云、我走^{ワレデ}、師云、我^レ、資云、唯心我走^レ、師云、以心伝心^{コト}、資云、飢^{ウエレバ}、餓^{シカツス}、飲^{バイナス}、師云、子細^ニ、資云、ヨツ、此阿難^{コト}、諸話^ノ、拽^ヲ也、師云、通^{シヤク}、樣、資云、喚^{ヨベ}、答^{コタヘ}、走^ハ、師云、徹^{コト}、資云、唯我^{コト}、走^ハ、師云、在^レ、我^ニ、三昧^ニ、資云、行住坐臥^ヲ、任^ス、意、師云、我亦^モ、不^レ、知^ラ、底^ヲ、資云、本有^ニ、妙心^ヲ、走^ハ、師云、畢竟^ニ、速^ニ、礼^ス、三^ニ、拜、

赤円大極也、陽也、夫也、男也、今也、右眼也、偏也、万法、心也、昼也、金剛界也、世尊也、普賢也、唯心影也、与佛也、黒円無極也、陰也、地也、女也、古也、左眼也、正也、不侶、心也、夜也、胎藏界也、迦葉也、文殊也、唯心也、唯佛也、卍字本佛本心影像、体也、赤黒二満久遠今時二心体也、音西、二心与影作用略也、音陽也、方法音作、西陰也、万法、密也、中間心、人々具足ケ、円成底也、無量無辺事量、以心、心也、世尊心華拈迦葉微笑、心通也、云云之以心伝心、

赤黒二円交會^ニ、事^ハ、心与^レ、心合^ル、處^ニ、世尊迦葉和合、妙相、以心伝心所也、中間赤円、和合一般体也、世尊迦葉一如、男女和合^ニ、起^ル、世界二形也、円万法、中間十字心、字也、極、際、亘^ニ、横^ニ、十方^ニ、處^ニ、是、満字、総体也、万法、自^レ、心^ニ、生^ル、故都、爐是清浄法身也、豎^ニ、一^ニ、陽也、等覺也、横^ニ、一^ニ、陰也、妙覺也、十字等妙二覺、始本有^ニ、無有^ニ、黒白^ニ、世尊天也、へ也、迦葉地也、ノ也、附伝^ニ、処^ニ、十字也、人也、誰^ニ、不^レ、教^ス、共^ニ、到^ル、春草木、自^レ、生^ル、翠^ニ、是無作自然理也、天受^ニ、陽^ニ、地出^ニ、生^ル、陰精^ニ、處^ニ、也、云云之以心伝心也、昔日從^ニ、燃燈佛^ニ、到^ル、今日^ニ、迄^ニ、以^レ、心^ニ、伝^ル、心也、師拶^ニ、云、如何是^ニ、心^ニ、良久^ニ、云、從來疑^ニ、著^ニ、此^ニ、漢^ニ、亦師云、如何是伝底心、御面低頭云、有^レ、我^ニ、三昧^ニ、吾亦不^レ、知、從上來嫡嫡相承而到吾、我今正伝汝畢、莫斷絶、

(印) (印)

(明庵) (東察)

(後欠)

〔拈華微笑參〕

拈華微笑、以心伝心タゾ、師云、父子恩在^ル、何^ニ、初成^ニ、父子恩^ニ、師云、如何是父子恩、云、刀斧截不同、師云、豎窮^ニ、三際^ニ、横亘^ニ、十方^ニ、時如何、云、此恩難^レ、報^ス、師云、理合如斯、云、恩多而難酬、師云、唯仏与仏乃能究尽、此時良久也、師云、摩頂、云、尽大地是子孫証明、向上一窮、師、如何是向上一窮、云、師与^レ、学^ニ、口^ニ、合也、師云、此時無鬚鎖子揺^ニ、兩頭^ニ、説破云、陰

陽移、陽陰移、サテコソ陰陽和合也、合面睡着也、師云、多子塔前分半座、師、東學西也、武帝第一義教意以テ祖意活法和合タゾ、祖祖父也、師本師也、盧遮那佛也、来ハ木也、西極陰也、此陰陽和合也、直指正法一足也、拟社大海硯、須弥筆、西来意、五字書タゾ、師云、沙門異類トハ、瀉山カトスレバ牯牛、マカトスレバ瀉山、畢竟心中働也、亦祖師心印形、鉄牛機是也、頂門眼也、来時如レ口、師云、如何是心中、云、柳緑花紅也、師云、好手々中呈好手、師弟掌合而礼拝也、紅心トハ緑也、偏正乱如レ絲、師云、臨濟命根、元不断一条紅線引手中、又脚下紅絲線也、血脈不断也、畢竟折合終炭裡皈坐、古今一路作麼生会、劃一劃而、参堂去、云、錯果然点也、頭尻無レ別、是回互不回互也、初礼間、云、如何是新年頭佛法、云、咸正啓祚、万物感新、

慈徳常住独応叟（花押）

（印）（印）

明暦四戊戌歳六月三鳥

付与広沢畢

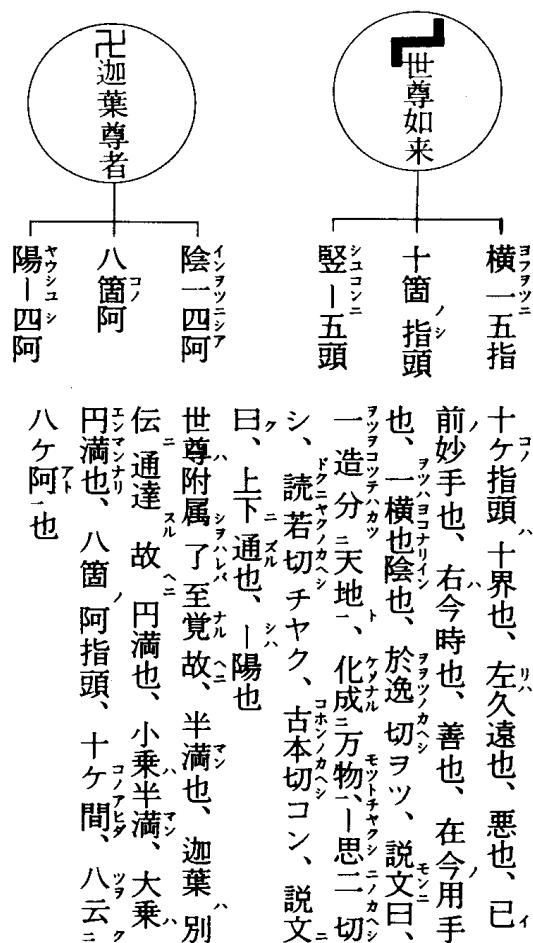
陰陽説や周茂叔の『太極図』などの援用による宗旨の敷衍は、五位説に関する門参・抄物にはしばしば見られるところであるが、前者では釈尊と迦葉を陰と陽に配し、その師資道合の以心伝心の消息を示そうとしたものである。後者の切紙でも、陰陽説の援用があるが、さらに多子塔前の付法説を引いて、師資の嗣法相承の場においては、師は東、弟子は西に

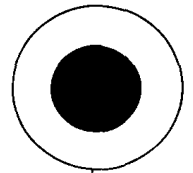
座位を占めるという、儀礼の説明にまで用いている珍らしいもので、五行で言えば木徳、方角では極陰にあたる西に弟子が座席を設けるのは、陰陽和合の義によるものであるとする。

次に、正法・眼蔵・涅槃・妙心等の十語に対する注脚・下語を中心とする切紙を紹介するが、まず、法身を釈尊、報身を迦葉に配し、その陰陽和合のところが三身円満にして迦葉出胎の当体であるとし、三種の図とともに示した、永光寺所蔵、嬖良所伝の「拈華切紙」で、

（端裏）拈華切紙

拈華切紙





世尊大師 世尊迦葉三十八也、故師資一鉢也、
和合妙相 是和合妙相云也、迦葉心其終附迦
葉也、別無法、華者本心也、不悟不
萌也、自心發生一華發開也、指頭陽、阿
迦葉和尚 陰也、天地二儀也

法報心之身、即當則根源也、法身報身世尊迦葉也、附屬和合
處、三身圓滿覺王也、亦嗣統朝即佛法誕生、迦葉出胎也、拈華
夕付屬朝、佛法不斷、無窮通力妙法也、

皆太末寶慶元年乙酉年九月十八日 嫫良(花押)

唐理宗帝年号也、自寶慶元年丁巳四年一紹定元年也、寶慶
元年本朝仁王八十五代後堀河院御宇也、丁嘉祿元年、紹
定二己丑七月十七日天童如淨和尚遷化、日本後堀河御宇
丁寛喜元年、後堀河御在立十一年也、貞応二年元応一
年嘉祿二年安貞二年寛喜三年貞永一年、合十一年也、道
元和尚寶慶元年御伝授也、自茲歲丁巳四年、如淨和尚遷
化也、

於洞谷山 改重書之者也、

というものであり、宝慶元年の天童山如淨より道元直伝の伝
承が付せられている。同じく正法等の十語の注脚を中心とし
た切紙を次にまとめて掲げる。埼玉県正龍寺所蔵、慶長七年
(一六〇二)寅碩所伝の「正法内意」、小田原市香林寺所蔵、
慶長十年(一六〇五)理琴文察所伝の「正法眼蔵付属血脉」、
永光寺所蔵、寛永八年(一六三一)嫫良書写の「拈華正法内
意、添物十則」の三種である。

(端裏) 正法内意也 寅碩

正法眼蔵涅槃妙心、実相無相微妙法門、教外別伝之内意
也、

正法者 諸法実相也、即心成仏也、上々根之人到得也、正法
入ハヲ向上ノ入ハト云也、向下ト云ハ初入頭ノ事也、

眼蔵者 一塵不立之自己也、
涅槃者 涅槃不生、離有相也、涅槃不滅、離無相也、生死透脱底、
大涅槃ト云也、

妙心者 不墮空劫主也、不汚染也、不似底也
実相者 柳緑花紅也、煩惱即煩惱也、不軌則也、

無相者 非僧非俗、非草木、不レ在禽獸、非天非地也、
微妙者 幽遠也、甚深也、佛祖不識也、

法門者 有天地有人天、有正法、無法無尽也、
教外者 一字不説也、不識也、不可得也、

別伝者 父子不伝へ、則禪道也、
世尊者 靈覺性也、性即是佛也、佛是心也、心即是道也、道

ハ即是禪也、禪之一字不レ凡聖側処、故曰別伝、
吉祥山沈金之箱在之、秘法密意也、

無心ノ拈ノ走、無心ノ微笑ノ走、夫止無心臥何道モ
岩松無心、風来吟無心兼也、向上之無心テ走、向上
之人ハヲ黄河一了、向下入ハヲ、黄河一了、

慶長十年乙酉歲正月三日 寅碩拜

(後欠) (正龍寺所蔵)

（端裏）拈華切紙

正法眼藏付屬血脈

正法者 諸法実相也、即身成佛也、上々之人到得也、
眼藏者 一塵不立自己也、

涅槃者 涅、不生、離有相也、槃者不滅、離無相也、
妙心者 空劫不墮主也、不汚染不似底也、

実相者 柳緑花紅也、煩惱即煩惱也、軌則不生也、
無相者 非僧非俗、草木禽獸非天地主也、

微妙者 幽遠也、甚遠也、仏祖不識也、ヲトス、
法門者 有天地有人天、諸法仏法無尽也、

教外者 一字不説也、不説不可説也、
別伝者 父子不伝也、則禪道也、

世尊者 靈覺性也、性即是、佛即是心也、心即道也、
道即是禪也、禪一字不處凡聖測上故別伝也、

祖々相伝如是 可秘々々

理琴寮（花押）

于時慶長十年乙巳四月十六莫書之

（香林寺所藏）

（端裏）拈華添物十則

拈華正法内意 添物十則

正法者、諸法実相也、即心成佛也、是到上々根大乘器旨也、

正法入端向上入端云也、向下入端云初入門也、
自本法也、

眼藏者、一塵不立之自己也、於万象頭都看見不及也、

涅槃者、涅、不生離有相、槃、不滅離無相、生死透脱底、是

大涅槃也、

妙心者、不墮空劫主也、不汚染一物也、不似底也、

実相者、柳緑華紅、煩惱即煩惱也、不軌則也、自妙容也、
無相者、非僧非俗、非草非木、非禽非獸、非天非地、妙主也、

微妙者、幽遠也、甚深也、佛祖不識不可得、妙也、
法門者、有天地、有人天、有正法、佛法無尽也、万法自大

教外者、一字不説也、不識也、不可得也、非言語、不干舌

妙也、
別伝者、父子不伝也、言説不及、非口宣心、故不伝也、是

則禪道也、
世尊者、靈覺性也、性即佛也、佛心也、心即是道也、道即是

禪也、禪一字不處凡聖側処、故云別伝也、

吉祥山永平大和尚仁治元庚子祀三月廿八日夜半書之畢、

于時寛永八辛未歲夷則吉日 改重書之者也

洞谷山永光良書之（花押）

（永光寺所藏）

これら三種の注脚・下語の仕方はほぼ同趣旨同一文言が共通して見られ、切紙には門派による相違がさほど顕著でないことがこの例によっても知られるが、正龍寺所藏のものと永光寺所藏のものに共通しているのは、「正法入ハヲ向上ノ入

ハト云也」「正法入端向上入端云也」の文言に見られるように、門参的性格が明らかである点で、その意味からは下語はさらに付加増大することを示唆しているが、果して年代的に下る永光寺所蔵のものが分量的に最も多く、十語の外に「世尊」に対する下語まで加わる。

さらに次に掲げる三重県広泰寺所蔵、子岑春桂所伝の「拈花微笑図」も、同じ十語を内容とするものであるが、前述の陰陽説を各語に配し、十箇指頭・八箇阿・和合妙相の三態にまとめている点は永光寺所蔵の「拈華切紙」と同趣旨で、注脚部分も同旨であるが、これに参が加っている点が異なる。

(端裏) 拈花微笑本則

左手一横位 三明始 五夏始 七外始 九横位一 正法看時不見星槃心花發明 実相冥々寂々 微妙葉落皈根

○拈花即妙○一箇指頭○横豎異名一明十○微笑○只是阿

○其形相口八箇阿

右手二豎位 四月輪 六右眼 八性空 十豎位窮 眼藏昏妙心十方利照 実相無色相 法門来時無レ口

○和合妙相異名、拈花即妙、左手右手、一中十位、云へ、横位豎位三四、左眼右眼、七八、左眼右眼、異名日輪月輪、三四、日輪月輪、空性空、九十、真空性空、九十、横一豎十、真

總結云へ、明々、横位豎当云へ、明、始又暗、終、左眼右眼当云へ、夏始理終、真空性空当云へ、外始外終、横一豎十当云へ、横位横、豎位豎、明々当云

へ、一明豎明、畢竟微笑唯是阿、阿形相云、口画也、四方一、也、八箇阿云へ、五指兩方向、和合妙相異名云へ、正法眼藏涅槃妙心、実相無相微妙名、左阿ヨリ八二合也、正法眼藏当云へ、看不見、暗昏々、□□合也、涅槃妙心当云へ、心花發明、照十方刹、実相無相当云へ、冥々寂々、無色空、微妙法門当云へ、葉落皈根時無レ口、

○横位八方具云へ、一四方四維、豎位天地二位具云へ、天地和合スレバ三位ヲ具、三位云へ、過現未振舞、一筆句下成上視下視、

○曇尊老花何拈御座走、一位拈御座走、頭陀尊者微笑何笑御座走、一位笑テ御座走、花從縁、微笑不從縁、外塵何ヲ道ゾ、云、色相申走ゾ、性ガ外走、一陰位、一陽位、和合妙相ノ十方見、一人横、豎ハ、人ノニツ也、(三宝印)

融山和尚 沙門英刹拜 子岑春桂(花押)

拈花微笑の古則の釈尊の言葉、さらに十三種の肢節に展開して注脚を加えたのが、永光寺所蔵、元和六年(一六二〇)伝受、寛永九年(一六三二)嬖良によって重写された「拈華十三種軌則」で、これは十語による展開とは全く内容を異にした下語からなっており、むしろこの「十三種軌則」の方が師資の嗣法相承に直接連なる意識が濃厚である。

(端裏) 拈華十三種軌則

拈華之十三種

拈華瞬目 心華未開發時、靈妙無私句咄然、
破顔微笑 發レ玄通レ玄、真照密々露、
吾有ニ主有レ主分、備ニ王化、神光神通、
正 当面合相、正位不正、極中極、
法 喚作ニ正法ニ話墮、靈々虛明、寂々自照、
眼 真智窮極十方不蹤、
藏 無為大空不涉變異、
涅槃 彼此人我本無倚依、真如法界、性無起滅、
妙心 眼自見、耳自聞、面前正來無内外、
実相 這箇元來不假形影、即是異中異、
無相 極而虛玄、前後進退不三分、
微妙 渠不修証、本淨明、山河大地般若心、
附屬 玄中玄、妙中妙、通身獨露、
的中的不識、世尊附迦葉、超然無二、前後一躰、空身、混
然難分、円明了了真見耳、

洞山伝法後之伝附也、亦洞山秘法トモ、

○心華未開發トハ、一氣未發先也、拈華瞬目靈妙無私句咄出
様也、是無説説云也、爰ヲ不聞ニシテ聞也、此靈妙一漚
先也、無私句トハ、平等句也、○發レ玄一露トハ、微笑發ニ妙
玄、通様也、本心ヲ發本心ニ通也、微笑処テ通ト見バ真
照密々トシテ露タ事也、此世尊有ニ密語ニ迦葉不覆蔵ト云
也、

○主一化、玄中玄妙中妙共吾ニ有トハ、世尊処アル也、神光

神通ト云モ此アル也、神タマシヒ、○当面一極ハ、正位在テ
正位二位セズ、正ヲ正ト不知ガ正位也、不識 不正不識
時、当面合相睡著也、此ヲ極中極ト云也、○喚作一自照、此
法喚作正法ト作、話ニ墮スル也、正法シテ汚染無ハ靈々虛明、
寂々シテ自照也、○真智トハ、種々識智ヲ屈泯ゼツスレバ真
智也、爰ヲ本智ト云也、此真智ヲ屈窮時、三世十方住著無
バ真智真眼也、○無為一異トハ、聖諦モ不為ガ無為也、時變
異ヲ事也、無為大空ガ宗旨法蔵也、何モ此納也、亦此ヨ
リ色々ヲ出生スル也、○涅槃彼此一滅トハ、此涅槃身、真如
法界性ハ、彼此人我本ヨリ倚依無也、真如法界涅槃性、起滅
生死無也、○眼自一外、此妙心眼、在見、耳在聞也、面門
エハ正來シテ内外無差別也、不露底妙ガ正來レバ内外一
般也、○這箇一異トハ、這箇実相也、化相 形影ヲ假バ実相
也、根本無形也、時異中異也、○極而一分、有相ヲ屈 極
バ無相シテ虛玄也、時前後進退俱一般也、虛玄 大道也、根本
皆無形也、○渠不一心、此微妙 修証無也、修
證、修修行也、證契證也、此渠本淨明躰ナレバ、修証
無也ト云ハ修シテ證一物デハ無也、山河大地共ニ一片 妙智
慧心也、般若智慧也、○玄中玄一露、世尊迦葉附屬ハ、松
緑ガ生ジ、竹ニ笋ガ生ジタ如也、附屬トテ新ニ何渡テ逸向
凡人ヲ忽佛躰作玉ニ非、釈尊玄妙ヲ拈ズレバ迦葉微笑シテ玄
妙中也、我ヲ挙テ我 叶也、玉發レ光光還自照ト云モ此事也、
吾光ヲ發テ吾ヲ照也、世尊 実身吾虚身合躰スレバ、一片本
身通、天地間吾獨 露也、乾坤獨シテ無二也、○的中的モ
同ジ心也、拈華的位ニ微笑的位ガ丁度中也、自然 通用也、故

二不識也、附了シラハレ諸聖エツチヨウヲ越超シテ、師資一般一鉢無二也、前身後身一鉢也、空ハヒロシ、化身シヤハヲ脱シテ広大ノ空身也、世尊迦葉シノケンナリ一体二混コンフ和シテ差難キワガチ分也、時キ円明ミンノ本鉢也、了ミツサトリタニシテ真見道也、了ハサトル、過去ミツサトリ了、現未了、自目了、自他心ジモクヲサトリ了、了サトリテ真真正見二達タツスルガ佛法大棟梁、現在大教主、諸聖頂上、宗門大明燈也、

皆元和六年春傳授之

亦寛永九年壬申夏 於洞谷山重書之者也

久外嫫良書之(花押)

以上紹介したような拈花微笑の話の参究を通して師資証契し嗣法相續につながるわけであるが、これらの調べが済んだ後、改めて拈花微笑の話の真意が師資の問答によって拈提し確認されることになり、これが「伝授参」「伝授了参」「伝授後之参禅」等と呼ばれる切紙で、永光寺所蔵、筆者・相承者不明(江戸初期)の「拈華微笑図之参」は、前述の一連の切紙の内容を前提した上で「伝授了参」が記されている。

(端裏) 拈華微笑図之参

拈花微笑之図参 宗門之一大事

●世尊云、吾有リ正法眼蔵ニヲ、云、吾不見時何不見吾不見之處、涅槃妙心ヲ、云、心花發明照ス十方刹ヲ、●実相無相、云、

中世曹洞宗切紙の分類試論(十六)(石川)

靈々寂々ジャク無色空、●微妙法門ヲ、葉落ハチ歸リ根ニ來時ナシ無ハジメ口、私、葉落リ歸ル根ニ拈花也、來時シ無シ口、微笑也、●摩訶迦葉、云、心境空寂、体如々、●附囑畢、云、以心伝心、止々不須説我法如難思、●花之拈提ヲ、代、諸法実相、●微笑ヲ、云、我亦如是、●両意折角有リヤ、云、拈花ハ從縁底諸塵、微笑ハ不從縁底劫外、●諦訛、云、從縁底塵、色相三昧、不從縁花自紅、●猶子細二、云、鳥不染黒、鷺サル不レ瀑白、私、根本ヲ能ク窮テ見レバ、李々ハ白桃杏紅ハナゾ、是ガ已前妙訣也、根本不出之處ハ适好見届ルタリ也、則父子不伝之妙也、以心伝心法也、●伝授了シテ参、師云、世尊三昧世尊不知、迦葉三昧不知迦葉、我有三昧我亦不知、百性日々用不知、●夫著語ヲ、云、三脚鉄輪不レ曲方、●勃陀勃地ヲ、云、一心ニ走、●其著語ヲ、云、葵華向レ日、柳絮隨風、●隨羊、云、茶ガ十吞飯ガ十喰、心夫々出ニタ自由也、私、洞下デワ爰ヲ祖佛凡夫不レ侵……龍眠深、始本不二、合面睡著ト云イ、簾内誰云イ、含人所不見ト云イ、師資相逢ニ伝ニ心法ト云也、済下デワ夜半ト云イ、酒肆姪房、魚行ト俣ノ肚裏ガ心佛受用也、●土神相見ヲ、僧云、師ノ前二至テ背向居下使トモ、不レ下シテ使トモ我ガ俣デ走、心ハ、護法安人当人也、●句ヲ、云、我為法於法自在、●石屋派デワ、師ノ前至ニウシロ向ニテ坐シテ、急度シヤク額シテ、トコガ辺際ヤ郎、心、神光ニテ柱ニタト云心也、

●撥開胸ヲ云、吾有正法眼蔵、柳緑華紅、又推合ヲ云、実相無相微妙法門、為レ甚緑、為レ甚紅、拈華付囑話、師云、世尊拈花、何ニトテ拈花付囑話ヲ云タ

ゾ、学云、世尊拈花^ハ話^ハ、拈花付嘱^ハ話ト云アツモ俟^ハテ走、●云、俟ト云心ヲ、師ヲ推除^テ其跡ニ坐ス、●其心、云、過去久遠劫ヨリノ約諾^デ走、●約諾シ羊ヲ、云、尽未来際永劫到莫断絶、●附嘱ヲ、云、一心通^ニ心^ニ、●通シ羊ヲ、学迦葉^{ニナリ}成代^テ、微笑シテ坐ス、●畢竟ヲ、学礼三拜、●伝法偈云、法本法無法、無法法亦法、今付^ニ無法^ニ時、法々何曾^{ナシ}法、●法本法、云、空^デ走、●空方何トテ本法^デワアルゾ、云、無法時、本法^デ走、●法付嘱シ羊ヲ、云、拈花下^カデ微笑シテ走、●拈花ト微笑トノ心ヲ、云、世尊三昧不知世尊、迦葉三昧不知迦葉、●畢竟ヲ、学、速礼三拜、

（後欠）

この切紙では特に、「伝授了参」の部分で洞下・済下・石屋派等の記述に見られるように、しきりと他宗派や他門派の参禅の仕方が意識されている。すでに切紙ではあまり他門派との注脚の異同は意識されていないという指摘をしたが、ここではそれとは逆に、極めて強い自派意識が出ており、やはり嗣法相続後の緊張感をともなう参禅問答であるということに由来するものであろう。ただし次に紹介する「伝授参」では、そうした自派意識のようなものは見られない。享祿四年（一五三二）の「伝授参」のあることはすでに前稿で紹介済なので、本稿は、同内容の瑩山—峨山—通際—無法—通天と次第相承した、天正三年（一五七五）慶松所伝のものを掲げて

おく、

伝授参

拈花話

先正法云へ、学云、威音劫已前之心ヲ正ト云、師云、法トハ何ソ、学云、心佛心法心道、從此万法出生ノ走、師云、眼蔵ヲ云へ、眼ニハ遍界ヲ蔵シタカ、遍界蔵シタカ、学云、遍界ヲ蔵シカクシテ走、師云、何ト蔵シタソ、学云、眼中蔵シテ走、師云、ソコニ蔵ノ物カアルハ、学拶眼ス、師云、涅槃ヲ云へ、学、伸足、有心、師云、妙心ヲ云へ、学放身、師云、即今忘却時如何、学云、忘却モ又不知、師云、ソコ□虚ニヲトシツケタカ、又空ニヲトシツケタカ、畢竟如何、学云、虚ニノ灵、空シテ妙、師云、虚灵切角虚ト灵トノ誦訛ヲ云ヒ持来、学云、虚全灵、々々全虚而重而虚全灵々々全虚テハアルソ、学云、法身虚空、々々法身、師、又莫作虚会、莫作空会、学云、中々申トシタワ大錯テ走、師云、何ヲ錯タソ、学云、何トモ云ヘ続キ走、師云、何カツマイタソ、学云、此精根カツ、イテ走、師、又ソコテ云へ、学、法尚応捨、阿況非法、師云、其上テ主道悟道ヲ云へ、学一彈指云、二度面ヲ合せ申サウスカ、師云、爰目前真大道ヲ云へ、学拶眼ス、師云、目前ト真大道落付様ヲ云持来、学云、遍界ヲ不蔵、師云、カクサヌ物ハ何テアルソ、学云、如来妙色法身テ走、師云、莫作虚会、莫作空会、正当

与麼時如何、学云、申トシタハ錯テ走、師云、主道悟道ノ処、行履作麼生、学、后手ニノ嘯キ仰テ面ヲ振、師云、拈花微笑テ走、拳頭ヲ握傾、師云、着句、学云、道体不分、水乳合、

瑩山通峨山、々々通無際、々々通無法、々々通通天、嫡々相紹、可秘、

天正三天臘月佛上堂日

宗寿授慶松九拜

(永光寺所藏)

以上で一応拈花微笑関係の切紙の種々相を紹介し得たと思われるが、最後に、前掲の「拈華微笑參(仮題、永光寺所藏)」の中でも師資の陰陽和合のところに顕出するはたらしきを示す類則として指摘されている「六祖頂門眼切紙」を掲げる。この六祖の言とされる切紙の出典は不明であるが、極めて古い伝承を有する例も知られている。(?)

〔頂門眼切紙〕

六祖云、頂門眼照破四天下、是那ケ眼睛、自面前指ニ灯笼露柱云、警眼警耳這ケ響、曰、眼々相對、頂門眼心相投、已前心永平大佛道元投機云、頭對肩兮耳對眉、此眼喚作頂門眼、是即正法眼也、一切開花老梅樹、是即瞿曇眼

睛也正伝承當、斯拈ニ頂門眼睛、百億須弥、百億日月、無辺風月、唯沙門一眼睛也、去不尽乾坤、灯外燈、又恕中云、我祖翁此話投機、我亦廿年前、涕淚非泣箇話當著、眼者總名也、明一実中道円真佛性、為是我豈恰契悟、觸體前有三本来靈、照徹毘盧頂顙乎、ケ眼掬開則明々不レ明、又合則暗々不レ暗、雖然亦不レ預開合也、或十八眼、或六眼、或五眼、以作頂門眼、又大哉錯也、雖与麼、其亦不レ捨莫而耳、透徹此語、即井驢話、三悟道目前、真大道正法眼法身呈露、何況其從亦復門歟、非正嫡未嘗知之、若不レ知レ之故、実者学道未レ弁正邪、奚為分別、深可秘密、不伝授底人、不レ可授也、口△警眼警耳不レ見自入、人語不レ入耳ト云云、一切開花、開落預又自、開花見如ナ眼ガ頂門眼也、響承當へ、

六祖云、眼々相對頂門眼、心々相投已前心、永平和尚云、頭對肩兮耳對眉、此眼喚作頂門眼、是正法眼也、此正法眼呈露投機、即是宗門、棟梁、叢林繁茂也、非正嫡不可伝授、可秘と、

師云、頂門眼、云、師、前入座シテ我ガアグノ下ヘ両手ヲ當舉へ、心混沌未分ト可心得、廿年卅年修行スト云モ、一度爰ニ洩底セウガ為也、ト云テ、未分ヲ遠見ヌゾ、喫茶喫飯上ニ未分理ガアルゾ、是ワ大源一派ノ大事、

云、頂門眼、代、本国ヲ云テ、我本名ヲ云也、心ノ畢竟產出ノ眼差也、●珠岩和尚云、頂門眼、代、眼ゲヲ指テ拳、心ワ睡起、眼指也、爰ノ眼ニ余タ物ワ無イゾ、師云、徹処ニ句ヲ、代、鴛鴦瓦上瞥然声一驚、心得自分之、●門本和尚云、頂

門眼、先頂門満門へ、見明星悟道ヲ引クへ、師云、著語ヲ、
代、唯佛与佛乃能室尽、心ハ、自己目前一致へ、畢竟著語、
代、只此、不汚染、諸佛護念処、

莫ハ思也、ヲモフ、林外云、門、垆ト同ジキ也、

頂門眼二通也、二枚可書也、

仲秋吉日

流附嫩良首座畢

（永光寺所藏）

この切紙の最後に付された参は、太源門派の大事とされ、
梅山聞本のものと思われる参も引かれるが、明峰派の珠岩道
珍の参も対比されており、やはり自意識が顕著である。ただ
し伝授者の久外嫩（嫩）良は明峰派下の人であり、永光寺切
紙の中では、嫫良所伝のものが圧倒的に多数を占めるが、嫫
良自身には自派である明峰派下の切紙という意識はあまりな
く、むしろ異なる派下の切紙も集成しようとした形跡が見ら
れる。

公案参得の切紙の中でも、嗣法相承と密接不離な関係を有
する拈花微笑の話に話題が集中した感があるので、次に代表
的な古則に関わる切紙を紹介したい。ここでは一則ごとにコ
メントを付することは避けるが、門参で取りあげられる古則
とは異なる側面もあり、やはり単なる看話工夫のためのもの

ではなく、宋朝臨濟禅の代表的な参究素材である趙州無字の
則もあるが、たとえば香巖樹上の話などは、十成を忌み、言
説による道得の限界を主張する点から、曹洞の宗旨を明らか
にする際にもしばしば引かれる。以下紹介するのは、「阿難
応諾之話（迦葉倒却刹竿）」（馬祖）即心是佛」「百丈野狐
話」「趙州無」「香巖樹上話」「香巖擊竹悟道話」「牛窓樺話」
の各則である。

（端裏）刹竿之話之切紙

阿難応諾之話

師云、迦葉刹竿話、甚麼トテ阿難応諾ノ話ト云タゾ、師代、
迦葉刹竿話ヲ、阿難応諾ト云モ俛テ走、師云、俛ト云心ヲ、
学云、師ヲ推除テ其跡ニ坐シテ云、主無主相、師云、其上ニ
喚応諾ノ機ヲ、学云、一心通一心、師云、畢竟ヲ、学即礼三
拜、

即心

唯一心

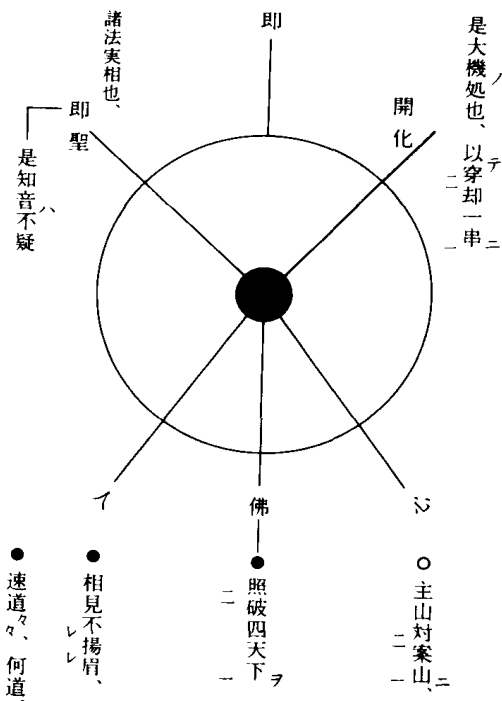
（印）
（明庵）

（印）
（東察）（花押）
（永光寺所藏）

（端裏）即心是佛切紙

○永平云、相識滿天下、○瑩山云、知、心能幾人、○峨山云、灯籠露柱、○大源云、不落明暗、作麼生是道、○梅山云、識得木上坐、○大初云、纖毫、不見、也太奇、

大源門徒ノヲス



寛永十七季三月吉日

融山叟与英刹畢

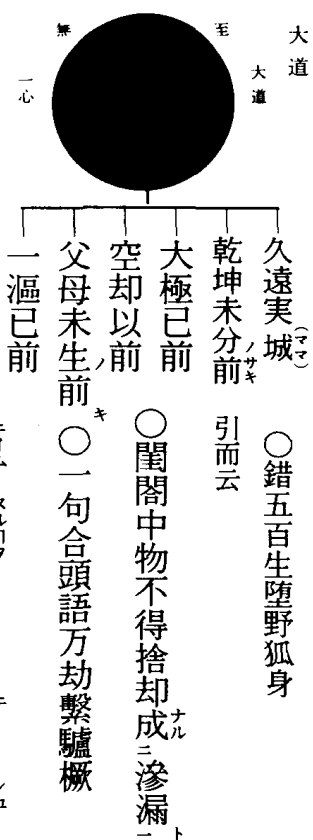
(三重県広泰寺所蔵)

(端裏) 野狐話切紙

百丈野狐話切紙 ○大修行底人還落因果也否、前百丈

云、不落因果、

中世曹洞宗切紙の分類試論(十六)(石川)



○不汚染当体也、○切忌墮ニ諸縁萬境ニ、○執著念妄、心野狐、為什麼脱野狐、○開無門云、贏得風流五百生、

古人頌云 ○春至開花秋來落葉

○樂 ○苦

○地獄 愼恚

○聲聞 ○餓鬼 貪欲

○緣覺 ○畜生 愚痴

○十界

○菩薩 ○修羅 鬪争

○諸仏 ○人間 五戒

○天人 清心

○四聖 ○六元

「」念脱ニ出野狐窟也、

○惡也、雷電風雲同時俱作一体、

○因果如三車輪、○大雄峰下一條路、

○類墮紛然作息同、○山下作牛山上僧、

○喜色、○和氣也、○春如三百年、秋似三月、

○有情非情、○一切衆生悉有佛性、

○豈元和貳_丙歲霜月吉日

（永光寺所藏）

（端裏） 趙州無
即心即仏

無話

○趙州云、無、劍為不平離宝篋、

又曰、有、藥因療病出金瓶、

畢竟如何、鉄中無_二皮骨_一、又、一夜落花雨、滿城流水香、

○或家有無字切帛、無字參切紙、皆分無字作_二図下注脚_一、全非家伝也、

即心即佛話

○馬祖曰、即心即佛、永平高祖下語曰、相滿天下、知心能幾人、懷昇和尚曰、甜瓜徹_レ臍甘、苦瓜連_レ根苦、徹通和尚曰、一双長創倚天寒、瑩山和尚曰、大底還他肌骨好、不塗紅粉_レ軀風流、明峰和尚曰、三世諸佛不知有、狸奴白狐還知有、峨山曰、燈籠露柱、古老曰、主山對_二案山_一、又曰、不見纖毫也太奇、

或家作即心即佛_二図而下注脚_一、全非家伝也、

（愛知県西明寺所藏）

（端裏） 趙州切紙

趙州無、師云、本無、代云、師前入_二心字_一画_二テ走_一、師云、有無兩位、代、円相作也、師云、本無当着、代云、心性正也、三字_二テ走_一、此心ヲ拂ツタ時キ佛也、能ク了得_二ソミレバ_一心佛也、二字也、於_二此二字_一、無形無相アル故釈迦_二彌勤人天持_一命根

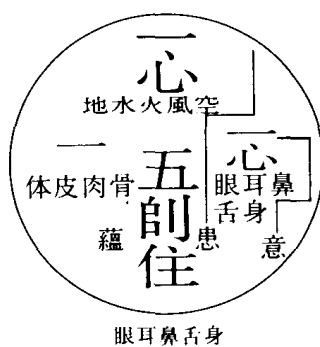
ナシ、外道天魔モ拱_レ手シタ、是即本無也、是即変ジテ●是○是也、空ニ_二ス_一、是ニ生滅ノサタナシ、呈ニ、世間、空、空ノ無_レ、佛性ノ空ハ空_二真也_一、ト云モ向也、引云、祝聖之回向ノ時モ心性正也、三ッ字モ向_レ、心者無極也、性大極也、正者混沌也、諸仏モ祖々モ心王無量寿仏ト可心得、

一此一点無味也無、

一心六点是也、即未飯

錢合、心此四点者味之

間、味之時無地獄也、



三 是即_二炉円也_一

心火心

南方觀音也

合物

二 心 西方即_二弥陀也_一

北方釈迦也

中央大日也

堅窮三際横十方無是也、天地陰陽一易二儀四像八卦是_レ、呈二種々ニ幻化シタガ_一、本無者無相無形ナニ依蹤跡者無_レ、サテ能_レ見ハ從_二面門_一出入スル也、

山唯独自明了、餘人所不見、 天牛含爪

(西明寺所藏)

(端裏) 香巖樹上參

一、樹上、師云、口含樹枝、足不踏樹二、下有人祖師西束意問ハ、如何答シ、答ハ喪身失命ス、不答者、他処問ニソムク、如何是樹上ノ一句、学良久ス、師云、樹下ヲ云ヘ、学、生下ノ振舞ヲナス、師云、樹上頭ハ易、樹下頭堅ヲ云ヘ、学云、樹枝ヲ含ム故、樹下不含故堅走、

一、庭前松根無虚空骨有、師云、虚空骨ヲ云ヘ、学云、此心カ骨テ走、師云、骨皮ヲ云ヘ、学云、皮袋一灵々々皮袋走、師云、畢竟如何、学、拳拳頭ヲ、

一、生下未分ヲ云ヘ、学、振舞アリ、僧申トシタハ錯走、師云、生下ヲ、学良久ス、師云、一句作麼生、学云、眼看如盲、口説如嚙、

一、六外一句ヲ云、学一喝ス、師云、正当与麼時、学云、能碎物破片ハ走ヌ、師云、休処ヲ云、学良久、師云、休ハワルイソ、学云、又休ス、師云、外ノ一句ヲ云ヘ、学三拝ス、師云、何トテ三拝シタソ、学、法知者ハ畏レ走、

一、向上孤峯之雪不白一句ヲ云ヘ、先雪山ヲ云ヘ、学云、五尺境界雪ナリ、万機万境ハ皆消物也、師云、孤峰ヲ云ヘ、何トシタカ不白、学邪正不露、々々物孤峰テ走、師又云、如是意者如何、学云、全身活卓トシテ不動眼、是覆千山形也、師云、如何是孤峰拶ス、学ハタト喝ス、便主不露、是孤峯也、師云、着句、学云、同中同、異中異、露地驚鷲

中世曹洞宗切紙の分類試論(十六)(石川)

立雪非同色、朝雪白鷺於是分理夏ヲ、学云、朝雪ハ理ヨ、師云、何トテ冬ナレハフラヌカ、師、夏何トテ白鷺テワ有ソ、現成底ハ皆夏ヨ、白鷺ハ自然来レハ夏ヨ、是ヲ理夏ノ商量ト云、白鷺下田千点雪ト云、句ハ理夏ヲ一句ニツケタル句、向上ノ句ナリ、

一、向上ノ二番、鄧州香巖智閑禪師、嘗示衆示、如人在千尺懸崖、口啣樹枝、手枝無所、攀脚樹無所踏、忽有人問西来意、不對則違他所問、若对喪身失脚、正当恁麼時作麼生即是、虎頭上坐ハ云、上樹夏ヲハ即不問、未上樹□□□、

(永光寺所藏)

(端裏) 香巖上樹

香巖上樹

是身是樹、因此身修行、蒲団頭打坐、是上樹也、一念知慚愧六根不妄動、是足下踏樹手不攀枝、口含樹枝也、於是若能身心脱落、樹倒人亡則、对他所問也、得不对也、得樹上也、遊戲場樹下也、遊戲場正与麼時、始見香巖為手段、破綻太多何也、只許人文偽不知自陷私、

或家作香巖上樹話図而下注脚、非全家伝也、

(西明寺所藏)

(端裏) ○牛過窓櫺

牛過窓櫺

阿難七夢經中云、訖栗枳王夢一大象閉在室中、唯有一窓櫺、象於室内出得大身、猶闔小尾、表釈迦弟子

中世曹洞宗切紙の分類試論（十六）（石川）

捨^テ世業^ヲ出家、如^ニ擲^リ身出^カ貪著名利^ニ如^ニ闕^ナ小尾^ヲ、

五祖演曰、譬如水牯牛過窓櫺、頭角四蹄都過了、因甚麼尾巴過不得、

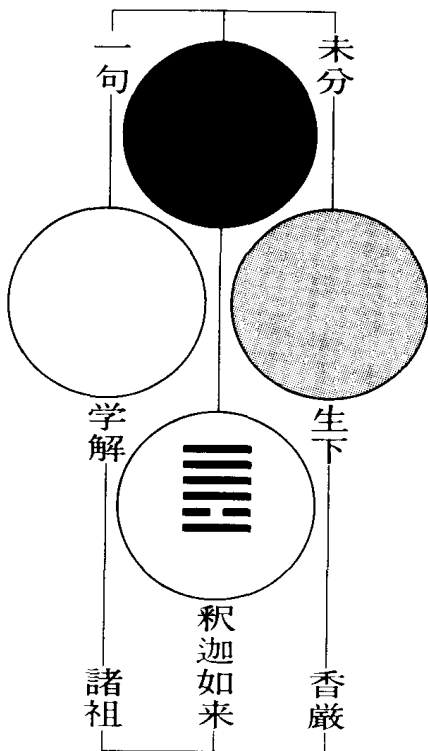
經曰、大象、今作水牯牛、借物顯法、於理無妨、禪者舌頭無骨、咩、彼為此常途手段也、五祖拈來為人話弄、与經所說理亦不全同也、如何是水牯牛、黑如雪白如鳥、如何是一室窓櫺舒光照、万機頭角四蹄都過了、因甚麼尾巴過得、劫火洞然毫末尽、青山依旧白雲中、又曰、甜瓜徹脐甘、苦瓜連根苦、或家作牛過窓櫺圖而下注脚、全非家伝也、

（西明寺所藏）

（端裏）擊竹悟道

擊竹悟道大事

四大脫落悟邊離却



父外娛良（花押）

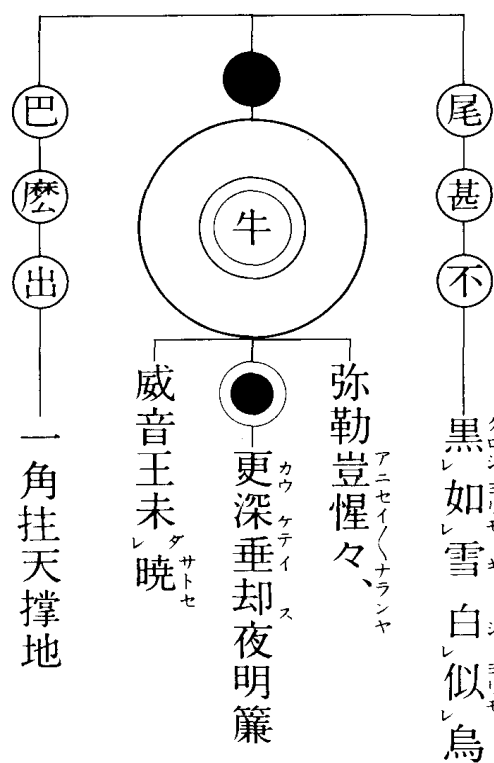
寛永九壬申九月廿九日 改重書之者也

（端裏）牛窓櫺切紙

永平元大和尚云、舒光照^ニ万機^ヲ、瑩山和尚云、嘘^キ一声^セ、

（永光寺所藏）

櫺 窓 祖 五



明峰和尚云、目前真大道、同云、能^ヨ々可^シ護持^ス、便是佛未出世、祖師未^ダ西来^セ以前^ニ、差破性^ナ也、大虚充塞元来不動也、義山和尚云、千聖亦不^ラ識^ラ、從前^ニと伝来^ニ而到^リ予

為後代吞良書之

（永光寺所藏）

（端裏）牛窓櫺之切紙

永平和和尚云、舒光照^ニ万機^ヲ、瑩山云、嘘^キ一声^セ、峨山云、^千聖亦不識^ラ、大源云、^口性難^レ出^ル、梅山云、莫妄想、

中世曹洞宗切紙の分類試論（十六）（石川）

沢大学仏教学部論集』十九・二十号、『駒沢大学仏教学部研究紀要』四十七・四十八号、昭和六十三年十月～平成二年三月）参照。

（3）通幻寂靈―了庵慧明―無極慧徹―月江正文―華叟正尊と次弟する、通幻派の一系統で、華叟開創の岐阜県関市龍泰寺は、下野大中寺・上州茂林寺・信濃大沢寺等の本寺になる。拙著『美濃国祥雲山龍泰寺史』（昭和五十五年十一月、龍泰寺刊）参照。

（4）（5）拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論（五）―叢林行事関係を中心として（続）―」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四十三号、昭和六十年三月）参照。

（5）拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論（四）―室内（嗣法・三物・血脈）関係を中心として（下）―」（『駒沢大学仏教学部論集』第二十号、平成元年十月）参照。

（6）前掲拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論（四）」参照。

（7）福井県宝慶寺には、同寺三世曇希筆蹟と伝えられる「頂門眼切紙」が所蔵されている。『永平寺史』（昭和五十七年九月、永平寺蔵版）上巻、二七九頁参照。

（8）駒沢大学図書館所蔵の円山派の切紙集『室中切紙』（二巻）に同一内容のものが見られる。

（平成二年度駒沢大学特別研究助成による研究成果の一部）